

合理は不合理、不合理は合理

経済調査部 藤代 宏一

貯蓄は“美”か？

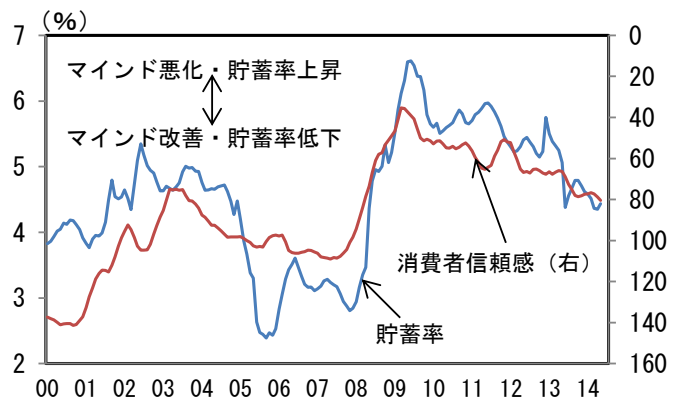
貯蓄とは「収入－支出」です。私たち日本人は貯蓄と聞くと「無駄使いをせず儉約に努める」といったような堅実で良いイメージを持ちます。派手な消費よりも貯蓄を“美”とする文化的背景があるようにも感じられます。また、「将来の不安に備える」という観点でも、貯蓄は少ないより多い方が望ましいと言えます。しかし、今一度、貯蓄が「収入－支出」であることを考えてみましょう。収入が一定の場合、貯蓄を増やすことは消費を減らすことに他なりません。収入が一定の下で消費者が貯蓄率を上昇させることは企業の売上減を意味します。もし、全ての消費者が貯蓄に励む一方で消費に消極的になれば、企業収益は減少し、結果的に貯蓄の原資となる給与収入も減るため、全体の貯蓄額は増えません。これを合成の誤謬（ごびゅう）と言って、個々人が合理的な行動をすることによって、全体では不合理が生じてしまいます。短期的な経済活動の拡大という観点に主眼を置けば、貯蓄率が増加すること自体は決して望ましいことではありません。

一見すると不合理でも全体では合理

それでは貯蓄率は低下した方が良いでしょう。良い例があります。最近の米国では消費者マインドが改善するのと時を同じくして貯蓄率が低下していますが、これは消費者が将来に楽観的になっていることの現れと考えられるため、少なくとも悪いことではありません。単に貯蓄よりも消費を優先させているだけのことです。筆者は、こうした貯蓄率の低下を歓迎すべき事象と捉えています。消費が拡大すれば、企業収益は増加し、給与も増加します。そうなれば、貯蓄“率”は低下しても貯蓄“額”は増える可能性があり、結果的に全員の貯蓄が増加す

るからです。個々人が貯蓄を優先しないことが、結果的に全体の良い結果に繋がった訳です。バブル崩壊後の日本では生活防衛意識の高まりによって貯蓄が優先された結果、経済が縮小均衡してしまいましたが、現在の米国ではそうした事態は回避されています。合成の誤謬に陥らなかったと言えるでしょう。日本でも、長引く不況からの出口が近付きつつあるなか、個々人の財布のヒモが緩むことによって、全体の懐が豊かになることが期待されます。

資料1 米 貯蓄率・消費者信頼感指数



(出所) Thomson Reuters 6ヶ月移動平均。

資料2 合成の誤謬・現実の例

劇場や映画館で、一人が立ち見すると、当初その人の視界は良好。しかし、やがて全員が立ち見するようになると全員の視界は変わらない。しかも、立ち見をすることによって全員が疲れる。家電メーカーA社が自社製品を値下げしたところ、当初はそのメーカーの販売数量が増加し収益が増加した。しかし、B・C・D社が値下げに追随したところ、総販売数量は増加せず、結局どのメーカーも収益力が低下してしまった。

(備考) 第一生命経済研究所作成